

鍼囊

一名歌詞三格例

上

815.7
Ka323h

078620-001-4

815.7-Ka323h

鍼囊 一名, 歌詞三格例

藤原 雅澄 / 著

上

M26

DAC-2353

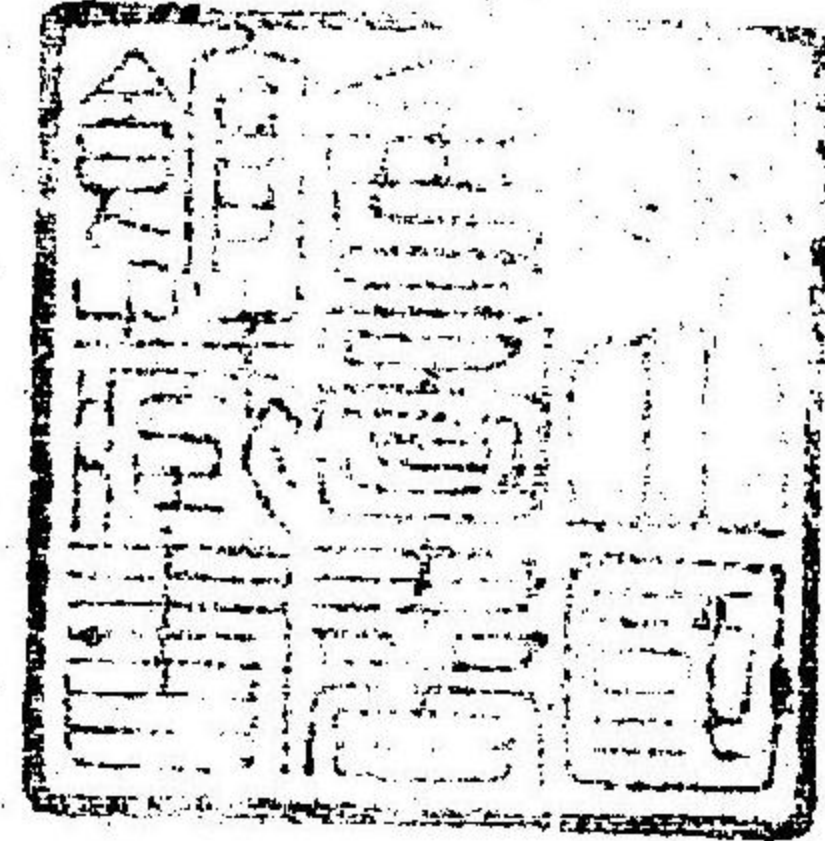


815.7 Ka323h

中
武根

此ふみを鍼囊と名つけたるゆゑよしを以
るによきたりものといふともはりてふも
のなくしての身よよそひぬへきすへやを
あるへきいふへの千これ言の葉れふ
き綾よまさりてうるをきをち出たり
ともぬふりさなくてをつひよそのいとつ
まの志るもあらし今此ふくろよえ
りつとへ入るる鍼をとり出てななくもみ

鍼囊上



245220

しるくも廣くも狭くもうらうへあへに
本末と、しくぬひつらねさらむよをい
えりめてときよそひをもなく得てむも
のをとてなむ

天保九年三月七日

藤原雅澄

正格 初丁

第二位よてりくる格 初丁

第三位よてりくる格 八丁

第四位よてりくる格 二十丁

別格 二十四丁

偏格 三十六丁

第一種 三十八丁

第二種 四十丁

第三種 四十三丁

第四種 四十四丁

第五種 四十五丁

第六種 四十九丁

格外本

阿行部 五十六丁

可行部 五十九丁

佐行部 七十七丁

凡例

一 證歌を引よ。一幾丁二幾丁とのみあるせは、万葉の歌なり。記とあるせは、古事記・紀とあるを日本紀あり。其他書名を畧き書ることにも有ども。万がよまづければ、ふことわらむ。はて記紀の巻別をあるまよふを神武天皇・條天皇・卷などあるを、天皇といふことを畧きてあるせは、はらふけぬか。こきわざなれど、所せきが故みせむ。うとぬく畧きれば、とり見る人、天皇といふことを加へて唱申を心あらひあるべし。

一 萬葉集の舊本、其他の古き書よ出たるよ、字の誤訓のうらひ

かどのいちゝるきをば改て引ゝるもをくれうらば疑を
 きをむ本書よつきて考べし。
 一照言を應ゝる詞の圍中の下つ方よ片假字よて一行あらせ
 るをむ二轉二行あるせるをば三轉と心得べし。あゝとむく
 をなくかひと云類ハ二轉あくあくあるあくれと云類ハ三轉
 かり本居氏の紐鏡よくし。其中可無等のきを二轉と定め
 うらハ古風よもとづきて云れむかの紐鏡と異なり疑ふと
 となりれ。

三箇位

<p>二轉 現在 ベシナシ</p>	<p>二轉 一き ウシキ コヒシキ オナシキ</p>	<p>二轉 過去 アリシオカシ みでし オニシ イニシ</p>	<p>二轉 現在 ベキナキ けき サヤケキ サムケキ</p>		
<p>二轉 む カシム タシム</p>	<p>二轉 ふ フフ オモフ ヌブ トブ</p>	<p>二轉 つ カツ ワツ</p>	<p>二轉 す ナス マス</p>	<p>二轉 く ナク ユク</p>	
<p>三轉 ぬ 又 カサヌ タヅヌ</p>	<p>三轉 つ イヒツ ミツ</p>	<p>三轉 つ オツ スツ メヅ イヅ</p>	<p>三轉 す 又 ヌス ウス ヌシス ミス ヌキサ オラス</p>	<p>三轉 く 來 又 アカ カク スツク アツク</p>	<p>三轉 ろ 又 ウ スウ</p>
<p>二轉 め カナシメ タノシメ</p>	<p>二轉 へ イハオモヘ</p>	<p>二轉 て タテハナテ</p>	<p>二轉 せ ナセマセ</p>	<p>二轉 け キケ サケ ツケ コケ</p>	

第二位

第三位

第四位

○正格ハ第二
位と第三位と
第四位とよて
上の照言を應
るをいふ第二
位とハ五十音
の伊韻第三位
とハ字韻第四
位とハ延韻を
さすこの三箇
位をえなれて
うけらるハ正
格又非すと知
べし。

はも徒

鐵囊上

表

四

不 動 位

● ■ つゝ	● さ	▲ しあ	▲ けらき	▲ らき	▲ ■ ○ けらし	▲ ■ ○ ら	▲ ■ ○ ま
-----------	--------	---------	----------	---------	--------------	------------	------------

○ ぞのや何
■ はも徒

○ 別格ハ、まゝらぬ詞にて正格のごとく、二つよも三つよも轉ることなく、又幾個位よて照言を應るといふは、まゝのひかきなき云。

正 格 圖

二轉 き アキナカリキ オナキ イナキ	二轉 し ウレシ コヒシ オナジ	三轉 未來 ミシ シラジ	三轉 り アリ フリ 紅葉ヲ鳴カ 浮タリ降カ 云メリ	二轉 む ミシ キカ 越ヤシ 逢テシ	二轉 る ミル ヨル	三轉 ぬ ミヌ シラヌ	三轉 る アル ラル 紅葉ヲ鳴カ 浮タル降カ 云メル	三轉 ぬ シラヌ オナ	三轉 ふ コフ オフ	三轉 む トム ウラム シラム ミシム	三轉 ゆ サユ キユ	三轉 ね ミシ シラシ	二轉 れ ミレ ヨレ	二轉 め ミメ キカメ 有ラテ 行ケメ 越ヤメ 逢テメ	○ ぞのや何
○ ぞのや何															

鍼囊上

表

五

別格圖

■● の哉	● の哉	■ な ん 近	■ 願 なむ附 なむ	■ 願 ね
----------	---------	------------------	---------------------	-------------

○の
▲こそ

偏格ハ大畧六種よとむといへどもな布かぎるべうらぬむ圖よあらそいづとし各證歌ふはきて考べし。

鐵囊 一名 歌詞三格例

正格

○第二位よてうくる格

現在シ
可無等の
きなり

万葉以往の歌ハ可無等の詞ハ上よこそといひてもきと
けてけれと云ることさらふさるいもと可ハべけりべけ
るべけれ無ハなけりなけるなけれなどそらぬ詞なれば
なり志あるを古今よりこなごいもとよりさるをくらきのあ

藤原雅澄撰



き詞を志ひてとらゝして上よこそといふときいべけれな
けれまどやうよ云こと常のさぶまり成なり。こころこそう
とてよくけれまど云るそれなり。往古ハ此等のけりけるけれ
ととらゝぬ詞をば上よこそと云てもけれと云ことハ
も有ことなし。されバ日本紀仁徳天皇卷よ。ころもこそふへ
もよき云く。天智天皇卷よ。あゆこそハ島へもえき云くまど
これらのきを古今よりこれならバ必けれと云べきをみ
なきとのみいひさるハさる故なり。此餘万葉十丁四十六丁よ。
かへらまに君こそとれよとくひれの白濱浪のよるときもあ
き十二丁よ。玉くろまきね妹もあらむこそ夜のながけ
くもうれかるべき。十七丁四丁長歌よ。野をひろみくさこ
そあげき云くまどめづらからぬことあり。この故よ。今此書

よハこそと云てきとくろを正格とす。な疑を。次下のき
とろけとるも今よ准べ。けふまでもいけれ。ひぢてぬれけ
れまど云けれハ別なり。さるハいけりいけるいけれぬれけり
ぬれけるぬれけれなど。もとよりとらゝていふことば
なればあり。思ひまごふべらば。されバ古とても上よこそと
云て。いきぬれきまどいへることのなきハ。もとよりけれとは
とらゝいふ詞なればあり。よきなきべきあげきまど。のこ
ぐひのきをけれといひさることのなきハ。もとよりけれとを
とらゝいふ詞なればあり。あるをこの差別あること
を辨ずて。上よこそと有バけれと云べきを。きといへること
のあるハ。古の一格なり。と意得ハ。いとおろそあり。さら
よ一格といふべきものよあらざること。上よ辨へることし。

けき

潔けき寒け
きの類あり

といふもろくる格是よ異ならび准

ぞ

ぞ

三聖寺 吾はまつる神よららばますらをこしきまつるかみぞよらまつるべき
古今二のころあしちるぞあししれんら花あつてよはるものはこのうければ

の

七共十 ことりのまじせのよるはまきんぬちのけりけりひこのつねなき
古今二 ひとりとのまをまぶつ秋の田はいななのそよとつひこのなき

や

十四十 ありしちしきりーつらぬまはるをさせくるあはをいふむなき
後撰十三 つゆだのつらるむむしのかひのなにかもぬおひのなとせきなき

の

十五十 ねむころにがしよひまれのころはあがらるものけりけるともなき

何

十二廿十 せむのころよはるまはるあむむらへんあかきまむむ妹よひびくま
支今十一 むぎしせのののなやせいのつてをたはひのひのふせとむなき

こそ

十四十 ころのころおちまはるあむあむる薬のむをら今こそ戀いまむなき
五社言 夢よこそみちこのことを見るべきをぞお浪こすちかのーほがま

過去
キ

有る無し
等のいなり

ふ

て

成ふー云て
の類あり

などいふもろくる格これよ異

ならび准べし

ぞ

一廿十 まんちのるあら野よあれどむみちのまきかーきむがかみとぞこし
後撰十 なるとよのちーつらぬれーあひのよこしとよらびよなきいぢせし

の 八十四字 旋頭 このまとの秋の野上はなごこの花うららみ人のかざりなごこのをれ

の 二十三字 さいかむをまへんやるんを更てあめとまいつゆにわが立ぬれ

や 二十一字 いふへんこゆらんちのいほんきすけらやなまきあごこゆるごと
古今五 うゑとき花まちごほよありきくうつろふ秋あまんとお見

の 新勅十一 いづらよいく年あみのこそぬらんこのめをまきまのまつや
十九字 いもにゆるんれ見よりあめめぬのやまぶきこれかをり

何 古今四 なに人のきてぬきかけふぢをうまくるあきごとこに野づをよおを
四十二 ひとひこそ人母待告告のまの誤とすあまきけをかくのみまてありうてなくも

こそ 後撰八 もみちぢをきみみきと見のどもあぐれとともふりてこそ

一き 喜一き戀一き等の一きあ
り。同ドきの一きも同じ。

万葉以往の歌よ、喜一き戀一き等の詞、上よこそといひて
も一きとうけて、一けれと云ることさらよあ、さるハ喜一け
り喜一ける喜一けれ、戀一けり戀一ける戀一けれなど、もとよ
りそらあぬ詞をまばなり、さるを古今よりあとい、これら
のそらあぬ一きの詞を志ひてをくらあて、月見れがぢ
よものこそかあ一けれなどいひて、一けれと云こと、常のさぶ
まりよ成ること上の
きの下よ云るも同じ。

ぞ 十廿字 ままらさるんものちのまにがふんせむんころあらんあしづくる一き
古今一はるの日はひつよあむるんれあまがらのあむるんぞび一き

の

後撰三 ふく風のささふ物といまりなむりちりぬるそれのきひてこひき

や

古撰三 ^{長歌}むらさきのあざむいさむおられたるあれやのなき云く

何

古今四 秋さぎもいづきぬれぎもいづきぬるいづきよはいのれき

こそ

後撰九 うみやまむしんらまになむいのみめいんせんもいんもき

以上ぞ

信明集 とふれづもきれやせんとおもふこそあひ見ぬよりむれいづき

の

以上ぞ の や 何 こそ の 照言を二轉のき ^{現過}

や

以上ぞ の や 何 こそ の 照言を二轉のき ^{現過}

何

以上ぞ の や 何 こそ の 照言を二轉のき ^{現過}

こそ

以上ぞ の や 何 こそ の 照言を二轉のき ^{現過}

いきの第二位よて應^{ウケ}こる例なり。

現在キ

可無等の
あり。

は

一廿五 ますらのさつちぢせをみちむらひいるまよかこいんたるにちぢけし

も

古今六 ふちむせむきよふちぢけしとつ川千とせをまちてせめる川のむ

徒

一廿六 うぢまぢがあせのせむむいんびかてころもかきへき妹むらうんこ

古今九 みやこいでけふこのれ原いづと川かそのせさむいころむかせやま

過去シ

有き無りき
等のきあり。

小き

てき

成ナリふき云て
きの類あり。

などいふもろくる格異ならね

バ。證歌をまどへ出せり。

は

二十廿一 たもふふー阿まりやーのづまづをさるあれいひてきんむづまむのを
後撰三 かぜよーむさうらうまうせんさうら花おほひあぬふちるいうかりき

も

二十廿一 かぐのりこひんものぞとおもさるばんむあむをまうぬよむありき
拾遺四 あまうらなまきはのがせむむのりきみとならそーのたはよぞあうけ

徒

二十廿一 かみやまのやまへまそゆふづのゆふかこのゆふよなうんちあひき
古今三 かきくらすところはやみやまどひふきゆめうつといよひとせむめよ

上件現在と過去とふてきとーと入かゑること。神代より言
靈の妙用よて。さらよ人の智もて。その志あるゆゑの理を推
きたむべき
よあらば。

い
意
シキ

喜一戀一等のーな
り。同のトも同じ。

は

二十廿一 むらなまをいれんていへふすーあれ野のことおーて心をたやじ
後撰六 秋ぎうのそもいづれーをみあへー立よる人やあらんとおもへを

も

十四廿一 あーがらのそこねの山よあたまきてみこいなるをあそんもあやし
古今六 いざこにむのがよいへるん菅原やふーみの里のあれまくもをし

徒

八五廿一 衣手にみーぶつてまごうあー田をひきんむのそへまもれるくるし
古今四 あれこひー今もえてーあ山がつのかきわよさけるやまとなでーと

未
来
子
ヌ

不見不知等のトなり。因よ。詞のどくのへよ緊要まらねど
おどろのーたく。凡て三をぢに轉るさごまり。同行の第二位
と第三位と第四位とに。交よ轉りかゑることよて。ことへい
明をあきあくあけ。指をさーさすさせ。勝をかちかつかて。

去をいよいぬいね逢をあひあふあへ讀をよみよむよめ有
 をありあるあれなどいふごとく。志あるよ不ひとり佐行と
 那行と行をあへてうつむこと。快ハヤクあらば思ふよこれももと
 を他の例も同トく。那行のふぬねよ轉るさごまりよて古く
 をあらにあらぬあらねとやうにいへりとおほえて日本
 紀神代卷よおきつとりかもづくまにまがるねしいもは
 和素ワス邏珥ラよのことぐも。天智天皇卷よ引ちは一のつめれあ
 そびよいでませこ云いでま一のくいを阿羅アラ珥ニ茹ヅいでま
 せこ云くと見えこり。これ上古の詞づらひのさるよて。將然ツルギ
 ときよ云りしるり。その後このふをあべてトとのみ云ハ。那
 行の第二位を。佐行の第二位の濁音よ通ツころるものなり。さ
 て已ヤく然ることよいふ不ズを不ズよといふ意のときよみとのみ
 るごとし。

云て。志らずよの意を志らよ。ああずよの意をああよ。あどい
 ひなれてより。おのづらそのもとの將然ときよいふよ。い
 失をてこ
 るごとし。

は

一廿下 玉藻うらみころるおきつとりかまきつりのまへらけをうらまされかよはも
 詞花三 あまやまの志みづいぐまドよごりなづやどれる月のくもりもぞする

も

十聖じやう まけあぐいめよもみえばつえぬよもあがかしこひんやむときもあらじ
 新撰しんせん ままきうぬうらみああらうかごきけなまねとつるひとなうりせむ

徒

七廿下 千をやぶるかひのみまきまをまきぬともをづつまを志のけきめ神

り
レ
ル

有レ居ル等ノの
りなり。

語尾コトノシふ

せセル

なナ

くク

けケ

めメ

紅葉せり鳴なり浮り
降りけり云めりの類あり。

又第四位を第二位と連ねて

けケル

せセル

てテ

へヘ

めメル

れレ

咲有成有持有思有
汲有降有の類あり。

などいふも。うくる格異ならね

む。證歌をまどへ出せり。

は

十三草 あめつちのかこをもれいりてきこひちふものハかつてやまびたり
古今ニ ふるさとありふりならのみやこよもいろをかそらばれいさきけり

も

十甲草 志ぐれの雨まかくふれがまきのそもあらそひらひていろづきにたり
古今先 あまそなるながられそむつくるなり今ハコゴをなみふとへん

徒

二十下 日かきうにおちゆきふれりおほそらのぬりふりきとにぶらまんのち
古今六 みや野の山は志ら雪つもるらふるそとそむくなりまはるるあり

以上は

も

徒

よていひかけて。二轉の現き過。三

轉のトリ等の第二位よてうけとる例なり。

○第三位よてうくる格。

くケ

鳴行等のくあり。漕次等のぐも同ト。明懸などいふくハあ
くあくろあくれかくかくろかくれの三轉よて別あり。其
中よつらひやうよよりて。二轉と三轉と二一へよなる詞
あり。ことへむ解をとくとけといふときハ二轉あり。と

何

長歌 一七二下 へふささらけけつしづりひかりんかまめしづりつりん

は

古昔記 詞 一七三下 うべも昔のそのこ輝かうがづ波の上舟を舟がさううみの中をさういひ

も

七十一 ことしはなげしめかたしんひたしーいんあひのさひひたしあひんあれる

徒

長秋詠藻 冬の夜けつきと雪ををるほとに花のときさへたしひのげよつ

ふ

逢思等のふなり呼飛等のぶも同ト戀生などいふふいこふ
こふるこふれおふおふるおふれの三轉よて別あり。

ぞ

一七三下 ぬまづらみならぬ木よいちをさぶるかみぞつこちふならぬ木ごと
古今一はるまぬと入んいんいんもうぐひまのなぬぬがづりいあらうぞおあふ

の

千載五 ゆふぎりやあきのあをれをこめつらんいんけいるそてにつゆのたまを
續紀十部 をみなといていひこーみやまがくらん云々

や

後撰八 かみれ月かぎりとやあふもみちのやむこまむかやくよるさへにふる

の

長歌 一六六下 たもーろみあれをおへうさぬつくりまなまかけらふ云々

何

一七四下 さかみのおはやまよりいあがしめり山よあめゆふきもあらんくに
千載六 すむみづをころなるといれいみこちりぞあゆのたをめをもある

は

一七五下 さがたいみやまをちやいぬれどもあれいんもよるのれきぬれど
金葉五 くわりあきさよのあつりにあふみあるあひのさといひのりさーそふ

も

紀雄畧 長歌 一七六下 たむももたちきみよまつろふ云々
續千載四 こよひーもいさあめつしむいひのりそああきのみやまをたむいこそやれ

や

後撰四 わたぎはまけづいびと鳴るるわのわのをき都を

何

五廿九 ^{長哥} このときんひのわーつれなむらよる

は

三廿九 こそんてーあまのへんよんてわれどあひんーあまをさるはる

も

後撰九 たぐれはまつふむかふる露のおるあーんあまをさるうらん

徒

十五十字 たきへよりあひのぼるよびせてさしげあらん旅のいなりを
古今七 なにそごきあみんしあま夜あまのきまにうづ鳴る

以上ぞのや何はも徒の照言を二

轉のくをつふむむるは第三位よて應とる例なり。

ぬ _{子ズ}

不見不知等
のぬあり。

ぞ

一十丁 あぢはりぬーまうんぬーをそんふのあまのうらよまぢむらぬ
古今二 さくらぞれとくちりぬとれたもあえげ人のころぞかぜもふきはぬ

の

昔万 みよー野のおまのあらゆきあみはけいでいさみー人のおとつれぬ

が

廿五字 見んといふらなこどもあうめ花ちりすぶらまぞもみらあぬ
拾遺九 くれこそいふもあらぬあまのあれぬあまもみらあぬ

や

四十五字 みやごぢまとはみやいよこのうけひてぬれいぬよえぬ
古今五 つまぢあらぬあまのあらぬあまのあらぬあまのあらぬあまのあらぬ

あ 四甲 けらへむひのなひんかひのせんかひんけんむんけんむん君のきんかぬ

何 十廿十 いめよにたどるもえぬ見ゆれどもあれのまどふこひのまげきに
新亭三 なつてんきげりよけまんとまきんたどるまどふひんこまかせぬ

る レリ 有居等の
るなり。

語尾よ せる なる とる ける める
紅葉せる鳴なる浮とる
降ける云めるの類なり。

又第四位を第三位よ連ねて。 ける せる てる へる める

れ り 咲有サケル成有ナセル持有モテル思有オモル
汲有シユル降有ケルの類あり。 まゝ第三位を重ねて。 くる をる

つ る ぬる ふる むる ゆる る うる
来る為る落る寝る経
る留る榮る流る知る
引云る得るの類あり。 又押の詞よ。 つる ぬる
云つる知ぬるの類あり。 などい

ふもろくる格異ならねば證歌まどへ出せり。

ぞ 続紀一 詔 志のまればくこぞちのゆるやわきくらぞちのゆるやな
古今丸 まくらよりあこよりこひのせめんれせんのしなみぞんしのよをる

の 靈異記 からすといふたかきさとのひんかのまむよといひてたぐちいぬる
古今丸 うめの花見よこそきつれうぐひまのひんくといひもをる

が 二廿七 ささみの志のぞいれまみまぐにうひまきまぐなむせりける
古今丸 さのうらに夏入まゆまのたけさくまよまぐひよりぬる

や

十廿一 あひ見て千とせやいぬるいなをのひもあれやまのまふまふかてに
枕草紙 元輔のちといえる君もやこよひの哥よえづれてまをる

の

十廿二 くれなるのこそめはちちのうらふのくきみや一のうたすれのひつる
千載六 いもづりこそわのめをわけぬけつたよのふけぬるやうらふなり

何

十廿三 あーひまのやまてんらとをひらまたまあうまつ君をくれうとむる
古今六 君をのみたひこぢはちちまひひついのそゆきのまゆるときある

以上ぞのや何の照言を三轉のぬるれ第

三位よて應々こも例なり。

う

得なり居植等のう同ト格なり多くハ證歌見あ
さらずといへども格ハこのごとく心得べし。

は

も

九廿一 久方の天の川原よ上つ瀬よ玉をーマこー下つ瀬よ船浮居云

徒

來なり明懸等のく同ト格

く

なり告舉等のぐも又同ト

は

續紀十 詔 天地の大き瑞ハあらそれくとなも神さうらなほーめんくのり玉ふ

も

徒

七、土寺 ちぢぢなのおち入るそのよわとぎはなくとひとつぐあこけまを
古今六 立田川やまきわうく神無月あぐれの雨をこてぬきよて
為なり、依失等のも同格あり、又令知令見等のもも同、令
聞令落など云も又同、此、オホ令をる意よりいふことあ
り、さて採をつまき忌をすらすらなど云い、さきの人のうへ
を敬いていふ古言よて、令をる意いなければ、格ハ一なり。

ま

スレ 十三、長哥 志うれどもあいことあげも云

は

十四、長哥 うならをよみうべむつりいも云

も

徒

八、土左記 君よけいこふら給ひもちぢぢれをせぬといややせーやも
土左記 出等のもも同、此、オホ令をる意いなければ、格ハ一なり。

つ

ツル 落捨等のつなり、ツレ 愛
出等のつも同。

は

も

徒

七、土廿、旋頭 ろまがなる三登の山月のおねいづみぢぢをのれむちつむにかげよみそつ
土左記 卯の時をのりふ船出にみな人の船いづ

押

ツル 云津見津等の
のつなり。

は

土、土廿、旋頭 わがこひいなぐちめかゆまけまづいぬもんぢぢのぬれを
古今九 身いまでうころまぢぢをのれむちつむにかげよみそつ

も

十草 こひつとけふいらしつたまぬしつたすれたるひをらとていらせん
新古今 ながさしつちのちまのあかかれたまのへーひをけよとらう

徒

古今 山このかかたもきぬるよなまじ家まらふよをのけてあなつ
寝たり重ぬ尋ぬ等

ぬ

のぬ同格なり。

は

拾遺七 鳥の子いましひなまづらちていぬかひのえゆるいさよのちうけり

も

十草 あつちゆきまほにあまもかへさそねふんまりふらんをかぬぬ

徒

押
ぬ ぬ 成ぬ等
のぬなり。

は

十草 あれのげよの身なうぬならんもきさのゆふどてひかへされば
古今 二 ころの野よこのなまんとこーものきちうかみ花よみちいまどいぬ

も

十草 ちんげふのいかにしつたかじつたかじつたかじつたか
支なせ くれんこひきくまりぬきみの江のきよれひめねいんよぬらこ

徒

古今 一 あつちゆみたてなもあけくまらぬもきんふらうつらうなつみん

ふ

経なり。戀生等の
ふ同格なり。

は

も

六百番 くれいさわそのまぐしとも見えわら枯野のむのこゑぞこひーき

徒

三幸子 べきもこごうるうめはきみごとこころむせつなみぎーあぶる
古今五 立田川もみちばまぐる神なびのみむろれやるにぶれあらうー

を

子ヌ 不見不知等のむなり

は

紀顯宗 いなむーろかそひやなぎみづゆげびまきちちそのぬうせ
古今三 夢路いあもあせめすかすどもうつにひとめとーこあらは

も

三廿一 つねんいんれぬあせんせあまのこんそんよんあけよは
古今五 ちちやぶる神代もきうにう田川からこれなるよみづうるとは

徒

二廿今 さまの宮まがりのけのそれちよりひとめにいひていけよかづのを
六帖五 春日野のわらむらまきれきり衣あぶれみづれかづうあられぬ

以上はも徒よていひあけて三轉のうくも

つづぬぬふむゆるむの第二位よてうけこる例な

也。

○第四位よてうくる格

け

聞け咲け等のけあり次
け漕げ等のげも同ト

こそ

ハサナ さつきのそれしちをなまきみびしめしやにこそぬけちらまへをーみ
管万もみちをのちりくるときんそにうけしちよあしききんそつけ

セス 成せ益せ等の
のせなり。

こそ 三十一 いかんかたがたのふかしのまをひいたまをせまひのり
堀川音とふひひのなまをまねのまをひひのりけりことませ

てッ 立て離て等
のてなり。

こそ 六十一 しのやどにちかふるうめをくよみよひくたをみまをこまて
拾遺 人志れどるまをこまをならんまひひをまをひひのりけりことませ

へッ 云へ思へ等
のへなり。

こそ 四十四 ままをひひをまをひひのりけりことませ
古今一をうつれば袖こそおほいけりものされあはれにうひまめなく

めム 悲め樂め等
のめなり。

こそ 十一 あめつちとく名のしをてあふこそまをひひのりけりことませ
後撰一をるの野よこるまをひひのりけりことませ

めン 見め聞め等
のめなり。

らめ けめ なめ てめ
有らめ行けめ越な
め逢てめの類なり。 などいふ皆うく

る格異ならび。

こそ 十一 よここのそりゆひまこ一をほみこそまをひひのりけりことませ
古今たれをそらちまはの山むけこそいかみよのことおひびづらめ

^きげ、^後後撰十 古今四をみなへー吹まぎてくる秋風ハめめて見えねどこのそーるけれ
 ーけれ 後撰十 あと見えぐるるさの濱千鳥今ハこゑこそまほーけれ
 このけれハ、可^{べき}をべけれ無^なをなけれ善^よをよけれ惡^{わる}をよけれ
 くと云よ同トさごまりあり志^しけれハ喜^かきをうれーけれ
 戀^こきをこひーけれ樂^たきをこのーけれ悲^{かな}きをかな
 けれと云よ同トさだまりなり古今集よりこの方ハ常の格
 となれりこれらのけれハちとけりけるけれとうごくこと
 かく生^いれ行^ゆれ有^あけれ濕^ぬけれなど云けれハ常のれれそとら
 きよてけりけるけれとちとよりうつて別なりまぶふべ
 ららば常のれをけれと云とるハ古風の歌よめづらーあら
 ぬことなるを上件のけれハ今京よりこゑと出來とる格よ
 て万葉以往の歌よあることあり前よくそしく云る如しき

れバ古ぶりの歌よ志あらむ人ハこの差別をきよくまきま
 ふべきことなるを今まで辨^わ知^しざる人のなきこそいとち
 けれかま今此書の本條よハ除て人のたもひ
 まどふことなれば姑^こに附ていへるなり

^一の
^こその照言をーのとうけさることハ古より後世の歌まで
 めづらーあらぬことありされどそれ三箇位をえなれてう
 けさることなればな不正格
 よ非^ひに證歌ハ別格部よ出^い

別格

まー

こそよいまーとうけとる例ハ見あたらげといへどもいづ
れの應言よもなる詞とたもえられバ左のごとくつらね載
さり中昔の歌よまーあと
うけとるハこれあまあり。

ぞ

四世子 たもふふー志よまるもれよあらませがちこびそあれ志よかへらまー
古今一けふぞいあはひ雪とぞふりあまーきえはありとも花と見まーや

の

や

古今一とるこれかやとるあつたら雪のみちゆきぶつよんこちこまー

の

五十四 たちぶねよかーふりててたままきままりのうらにやどりかせまー

何

八十五 どのせことふり見ませばいくをくのこのふる雪のうれーからまー

は

古今六 いよありてをのぶより見ばまぶさむるころのあらまー志なきねとも

も

古今一 よのなのにしえてさくられさつりせばをるのころいのでけからまー

徒

二四十一 つまむあらばつみてこげまーさみは山野のへけういぎすぎにけらぢや

こそ

後拾遺一 ねむひおくことあらまーまはまらちりての後のふなでさるせば

らー

からーといふもうくる格異ならず准べー。

ぞ

古今六 朝廷のまむりこーて関よつあまつれがぞ國は多くあれども美濃と
續紀廿六 越前と御占合て大嘗の政を取もちつあまのさくらー云々

の

一六丁 長哥 このかそのゆるることなく此山のさやしあーらー云々

が

九廿五 天の川まうこちをさけへんこまがまのまみぶがふなぞすらー

や

十九 聖かそほよむゆきいふねやみまのうちにさびうらなうらーおせとらなみこ

後拾遺三 まつるやんつひあさるらーかこまの老ななめぞうれーかりける

九廿丁^{長哥} うちこえて各ふちるわうよかぢまつりせな

同廿丁 しんたぬのきそみのしるよあましののさうぢらふしむみちんをらな

十卅丁 しものさしおむんいふーしものさししんしむれはばららさーるも

十卅丁 あぢもあうよふけすけりいまみんしんみゆめあひよとままけな

同卅丁 あうんのきむのきむいひもむれにけしむぢつなあふいひのめ

十卅丁 いしあまぢいけーくならぬかーきしんしんかみんしんみゆらふしな

十九卅 ちんちんまけしむあぢあぢらうにうつなうけかれすたうのぢ

同卅丁 きみぢらうにうぢらうのぢをぢらうにけしんかみんしんみゆらふし

廿十丁 しんまつのぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

同卅丁 おぢんてんちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

廿卅丁 うしせんいぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

同 けのふゆめぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

上宮法 王帝説 いのちぢけこのかき山のぢぢぢ木けそらなることをきみよまをきな

願 なむ

附

なむ

願ふ意のなんよづくに。カ葉よハな。なんあは。なんあら。なんなどのみええぞいづれも第一位の

阿韻よりつづけたるにかぎれるごとし。第四位の衣韻よりつづけたるごとたまをる。ハ。十二十三丁の歌のみなり。そはとまぐ衣韻よりつづけたる歌ハもれて傳らぬよもあらむ。古今よりこの方ハ。た。なん。いた。なん。志。ら。なん。或ハ見え。なんとけ。なん。いで。なん。など見えて。第一位の阿韻よりも。第四位の衣韻よりもつづけたるおあ。

は

九廿丁 こぎもこころにあらなんいぢらうのあぢなんのこまもてんまを

鐵囊上

五廿一 あがぬーのみまふしつそるせらぶならはぬやうめぢぢんまそね
二廿一 とくら立かひーかりのこすしちたをまゆめのをのこぢいんりこね
九九下 あこもよーきんゆくきみぢまづち山こゆるんけぢぢぢめすぢぢぢね
五十二 きみこずらかぢぢせんあがの二人うぢーまつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
十九廿一 ^{長哥}つきにひよかくーあそぢぢぢーぢぢぢぢぢぢぢ

十四下 あらしまのせのんやーなをいぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
十九廿一 うつよめーしませんぢ大殿のこのまとぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
同 廿四下 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
同 一十二 わぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
九、十下 なふそぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

後撰十 わもそんこのめーこいひあるはぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
新琴十 玉のをよんえぢぢぢえねなぢらぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

以上 は も 徒 よていひあけてななむねよてう

けこる例なり ぞ の や 何 こそ よてせいひの

けぬさごまりなり

偏格

偏格といふものは大抵六くさの差あり。志のれどもあをその外さまくの異ありて。こまらふいへを六くさにとゞまるべきは非む。そむく古ハてよをはといふ名もなくさだもかりりを後やうくことむつあひくをしくなれるまよて。みをその名もいできそのとくのへれさだまりなど。くさぐさどめいふことになれむこそあれ。上つ代ハあが何事も大らあよて。あることまらふはどめいふことをまらるるれむ。古のことむよハてみをはとくのをさることたかくて。心まあせよいひさることさまぐありと思ふい古の書をくをしくとどらざる人のことよて。いとくあらぬことあり。この詞けとくのひいよろづの技藝アタマウガなどのごとく。後世よしくみて定めさるものよハはらふあらず。天地のをどめより。言

靈のちをひよよりて。おのづから定まれるものふり有けま
む。ことさらに心せざれども。たのづからよくととのわりて。
あづ山がつの常れことひよまら。露あやまつことなりの
しが故よ。いよへいことにこれをさごし學ぶこともな
りあり。さる故よ。萬葉以往の歌よ。くきぐめづらき詞。
又いひさま。つづけさまなどにこそ。古今集よりこなこのよ
くらぶれむ。いと異なることもおちく。中よ。はいやげま
る詞もまどれまど。てみをはのど。のひよいとりて。百よ
ひとつもさぐること見えざる。古の詞のど。のひれ
のづからよそなそりたるが故なり。万葉いきよくえらべる
集ふもあらず。あぢきくみ志とび見ろふつけて。かきあつ
めたる集まるすら。そののをぬはをさくまどらぬをもて。

なべて古のてみをはのど。のひれ。やまくさだまりてあり
つること。をさとるべし。まれく舊き本よ。いづきふりの
あるは。それも後よ訓誤れるがたなく。又字を寫し誤り書か
と。しなども志とるものとえゆれば。よく古を考へてくそし
く學ぶとき。いまさしくさへ。とれをもろく。有ることな
し。然るをせくだつま。に。ことばよ。こなまりくづれ。みやび
こと。い物うとくおれるによりて。さかふふもいできぬる
まくに。とらくさだすること。もをどまりたり。さるるらに。
まべて後の世よ。大のと言の葉れまぢ。づの。もとめ。あき
らめ得たり。とみづら。おもひゆるせる人まら。ともをれば。
とりをづりて。あやまること。のおほある。詞のど。のひく
づれよ。こなまりて。いとみどりなること。れをき世とまれる

ふよりてそをわきまへささることゝもやすうらざること。詞
 のととのひれたのづうらそなをりさる世は生れあひさる。
 賤やまがつよも志のざることなればなり。志のるを此てふ
 をはのととれへのみハ。万葉よりをちつ方あるをばたわろ
 ろに見をぐして。多々古今集よりこなこのをのみ守りて。と
 かくさだめいふこそ本意なけれ。志ののみふあらず。學ぶ人
 の心よおもへるやう。古ハよろづつうくく。ささのからぬ
 ことなやけき。古今集よりこなことよこそ。のりもさだまり
 も。やうくそなをりきぬることなれと思ひて。まがまらびの
 カのともきことをばひをば。古よさへきむつくるぞふく
 き
 や。

○第一種

是ハ三箇位よてうくる例もあらず。をさらのぬ
 詞よてうくる例もあらば。古よりの一つの格なり。

さく
 なく
 はく
 まく
 らく
 けらく
 けく
 べく

此中さ
 くなく

はくまくらくけらくハ第一位の阿韻よて。すぬふむるの言
 の伸りさるやういちりきをけくべくハそれとハかそり
 て。詞の起れるやういさの異なるれども。てふをはのととの
 ひの格ハつなりと知べし。さて又なくけくべくハなきな
 けきけべきべきなどそらけども。さくはくまくらくの
 くと。きーのうごきなけれバ。別格ハ屬べくも思をるれど。右
 の八品ハ詞ハ皆同トとのへけ格なれば。志をらく偏格と
 定む。但し其中。まらハ。もとまくらくのうごきさるもの

上件第一種ハ古より定まれるづの格よりてさらに
 うごくまどき例なるを後の世に歌よのみ目なれて
 口つゝあざる人ハ心あざしく思ふこともあるげき
 どあうらびよく古風を學び得たらん人ハ心さうあ
 疑まどきことなり。

○第二種 是はてふをはこがへるよ似て違へるにあ
 らず故と言をかへてうけとる一ツの格なり。

め

あ

何

は

十段 ぎつひのひは朝はんのひをてふひのひはさかひのひは

二十 玉がら花のさかひのひはさかひのひはさかひのひは

三十 見えはひのひはさかひのひはさかひのひはさかひのひは

四十 あらがめ入言はひのひはさかひのひはさかひのひは

五十 ちかひのひはさかひのひはさかひのひはさかひのひは

六十 ちかひのひはさかひのひはさかひのひはさかひのひは

紀神功 ちかひのひはさかひのひはさかひのひはさかひのひは

西十 ちかひのひはさかひのひはさかひのひはさかひのひは

を韻通ふまゝにとよかへていひのけたる例なり。但

これも東歌よかぎり。十四十四丁よ。志もつけぬあそめか
そらよいふまずそらゆきぬ。よなぶらるのれとあ
るもぬるをつめてぬとのみいへる東詞なれば
これもぞとあるべきをよかへていへるあり。

○第三種

是ハ上よそのや何等の照言をねろざればけりへり
なりむつぬ或いかもるど應べきをけるへるなるむる
つるぬる。或ハきさどいひてを
てよ意を含ませたる一の格なり。

る

は

十六字 ちとぎにどねけいしち花のなれちよとまきかたよとよむる カモ

徒

廿二字 志まらへいねつとあらそめのみよとまとそつあをねいなる カモ

同廿丁 妹をこそあひとよこ一のまよ引の横山へるけまなまをたもへる カモ

廿七丁 ちとぎにどねけいしち花の玉ぬへちまきかたよとよむる カモ

十九字 ちとぎにどねけいしち花の玉ぬへちまきかたよとよむる カモ

十八字 いのよせらふたのうらそよとていへに君のせんとこれとよむる カモ

廿五字 くらめく君もあつちの梅のちつをぐらまでとめびあけ カモ

廿五字 あひよあひてものおもふらけの袖よちつまはぬるかあある カモ

後撰一 ふる雪のみの一ちちまきつとるまにけりとねらるこれぬる カモ

しき

三五平 長哥 ころちかこにまわりけめのも ㊦㊧㊨㊩㊪㊫

四五平 こころにんじふのうらむをまらうのさかへりみづのあまのまへ ㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲

十五平 あぶちのみひもみゆがにこすなびくをそとをたまふ ㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹

徒

記應神 長哥 ころちかこにまわりけめのも ㊦㊧㊨㊩㊪㊫

十五平 こころにんじふのうらむをまらうのさかへりみづのあまのまへ ㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲

こそ

十五平 旋頭 ころちかこにまわりけめのも ㊦㊧㊨㊩㊪㊫

十五平 長哥 ころちかこにまわりけめのも ㊦㊧㊨㊩㊪㊫

十五平 ころちかこにまわりけめのも ㊦㊧㊨㊩㊪㊫

以上やの何徒こその照言をたきてそのう

くる詞をまゝらける言の下よいひさして残り或ハ

直よ何こその下ようくる詞を畧きて其意をもつ

せしる例なり其中くものかくせるあまつしりかも

カクセル ころちかこにまわりけめのも ㊦㊧㊨㊩㊪㊫

この句は照して今この句をことさら畧きていふ

一、格ふて、こほりよ云とき、理いさゝの異あること
 なれど、畧きこるさほり一なり、あか照畧のことい下
 ふもいふ。

○第六種

是ハ歌のさま、詞の志らズよ志らざひて、さざまれるて
 小をはのど、のひをことさらよし、うてうけとる
 の格
 なり。

ド

何

廿四字 ほとぎすまづなくあまけいよせむぶがどまきぎ、かろひはぐまて
 これハ上よいふよとあれど、過ざらんとうくるこ
 とて小をはのど、のひれさどまりなれど、然いひ
 てハよろーのらぬゆゑよ、むぎどといへるあり、と
 りをづいてて小をはを誤りとるよ、いあらず志の
 るを、此歌を詞玉緒よて小をはとが、入る歌中よ入
 たるハ、未々、よくをーからざるがゆゑなり、ハ、廿二
 丁よ、ほとぎもこが、かこのねぶいけど、くも花の
 みさきてみよならド、ものもとあるも、ならざらん
 の意をさらド、いと云、十二卅八丁よ、うなづく青
 垣山のへど、うらば志む、君をこと、ハド、もの
 とあるも、とをざらん、れ意をど、ハド、いと云る

などをも考合て、とりちづりて、おをはごがへと
るよ、いあらざるを知べし、古の詞づらひのさまを
よくさとり、味ひ得ば、疑ならん、うし、未^まておをは
を誤るやうのこと、いなき世なりければ、とりてづ
まづき謂いさら
よなきことなり。

一

後撰十一 みるめ^らるか^らぞあ^みよ^なす。と^きん^んま^まを^ちか^あま^いか^づの^ぬ
これハ上よぞとあれば、なきと^うくること、てよを
はの^ぞの^ひれ^さご^まり^なれ^どさ^いひ^ても^かへ
りて耳^みさ^をりて聞^ぐる^き故^ふ、な^しと^云る^か

るべし、かうやうの類なを後くよハめづ
らしからねど、うるさければ、もらしつ。

右ぞの照言を、一とごがへてうけざる例なり。

過去

は 十^五甲^十 世^の中^にま^まよ^うに^代に^行ぢ^う。と^きん^んま^まを^ちか^あま^いか^づの^ぬ
これハ上よそのや何等のことなれば、さ^りき^と
いふこと、ておをはのと、のひのさだまりなれど、
さいひて、いよろしからぬ故、さ^りし^とい^へる^こ。

徒 十^五甲^十 い^よあ^まい^ひし^んま^ちと^きん^んま^まを^ちか^あま^いか^づの^ぬ
これも上よぞのや何等の言なれば、て^きと^らふ

緘囊上

こととみをはのさのひのさごまりなれどさい
ひていよろーあらぬゆゑよ。て。とのとまへるこ
八手 ぶるさとのなら。れさのな。ぎんことづげ。ち。い。よ。つげ。き。や
これも上よぞのや何等の言まければやりきとい
ふこととよをはのさのひのさごまりなれどさい
いひていよろーからぬゆゑよ。やりどといへるよ
や。但し此歌を拾遺集に載るよ。い。ことづてやり
きとあるをおもへば。もとす。どの字あり。を。之
よ。罵。あ。や。まり
ころよむあらむ。

三平 なる霞がまがむ。さ。の。う。さ。ご。ま。ぎ。な。り。あり。とい。ひ。い。え。い。き。に。えん
これも上よぞのや何等の言まければいひきとい

ふこととよをはのさのひのさごまりなれどさい
いひていよろーあらぬ故よ。いひ。と。云。る。ら。ん。
二十三丁「まがせこをやまとへやるときよふけて
あゝときつゆよあが立ぬれ」大船のつもりがう
らよのらんとハ益為ル一アてあがふよりわら
どがとあるをうけて。といへるなれば正格なり。
つ十二丁「かぐ山とみ。な。山とあひ。ときさち
て見よこ。い。な。み。く。よ。え。ら。と。ある。ハ。見。よ。こ。よ
ていきれむ。下の御向ハ。立。て。見。よ。来。い。な。み。國。原
ハ即此地なり。といふ意なれば別なり。思ひまがふ
べら
ら。で。

右は「後」の言をうけて、「とぬの」つていひこる例

なり。

り

の

古今 長等 みるのあづさねのなるたのたをまあり。みく

古今 あきの野は人まらむのこまをまあり。これのゆきまてはなをからん

千載 玉つねはなみづのかさるこちとまらるるらよかうはすくなり。

これら上よ「の」とあれ「な」とうくること。ておを
はのさゝのひのさどまりなれどさひひてのかへ
りてよろからぬ故よ「後」の格よてなりとさゝの

の

紀行 徳 みるのあづさねのなるたのたをまあり。みく

これの上も同じ。

ぬ

ぞ

古今 みるのあづさねのなるたのたをまあり。みく

これも上よ「ぞ」とあれ「ぬ」とうくること。ておを
はのさゝのひのさどまりなれどぬるをつめて
ぬとのみ云るなり。もづてぬるをぬとのみ云るこ
と東歌よ多し。下よくを。十四十四丁よ「きもつけ
ぬあそのかをらよいふまはぞらゆどきぬよな

かろろのれとあるも空ゆぞ来ぬるといふべき
をぞをいのかへて東歌よ云る例なればぬるとい
ふべきをぬと
のみ云るなり。

ぢ

あひきの山のづいよまつとちぬれぬまのづいよ
これも上よとあればぬるとうくることておを
はのとこのひれさごまりなれどさいひていおへ
りてよろろからぬ故よ徒の格よてぬとごのへ
くるありのよ同ドク
軽きことむなればなり。

以上ぞのぢといひてりぬとうけさる例なり。

但しのおけ言ハぞや何よくらぶればやゝ軽きぢゆ
ゑよぞや何の行をむづれて徒の格よてうけさる例
まゝありこの故よのぢはぞや何の行よたきがとき
こと多し志のれども其はそれ歌のいきわひ詞の志
らべふよることよて大旨はぞや何の行をたきてを
づれぬことなりと知べしよろせびハあやまりぬべ

く。

上、件 第二種より
第六種まで 偏格ハ、みあ一首の志らべ心詞の味

有て云ることなれば、あ一とより見をぐてよ
み人此本意ほとくかくれてあらされずなりむハ、
いとくちをきことなるべし。

○たほよそ此書は偏格とさほもの、幾種イナクといかぎり

ていひがとく、はるハこまゝにいふときハ、右のさぐ
ひいくつも有べきなれむなり、志られども今ハその
目ぢらまかぎりをつみいで、姑く六くはよとり分
てとぐめつ、又かりに種を分とるハ、初學の人此見安
からむがとめよとてなり、あハ偏格よとぐひつべき
も此、その言れいづるよ因ナリて、下の格外の中よいふ。

十七年 あつちのちかあんとつたのんぞりあせのちかあつてわかれ

頭ニオク
い

記神武 ^{長哥} いなめていぢちのちかあつてわかれ

同元恭 大王をたまふとつたのちかあつてわかれ

十七年 ^{長哥} 八隅一吾大王の朝のちかあつてわかれ

同三十四 青丹吉なるのちかあつてわかれ

同三十四 白雪なる冬の林のちかあつてわかれ

同三十四 ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

同三十四 ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

同三十四 ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

同三十四 ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

同三十四 ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

十七年 あまの川のちかあつてわかれ

同廿二 ^{長哥} あめつちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} あまのちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} うまのちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} あまのちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} のかこき道を島傳ひつた

同廿九 ^{長哥} いのちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} うなひをとりあをちかあつてわかれ

同廿九 ^{長哥} あつちのちかあつてわかれ

紀継体 ちかあつてわかれのちかあつてわかれ

古今志 ころのそらよせくるまみのきびへもえまくのちりきまづーまのひ

同ニ 志のハるびたけごかしせぬちのきだのうまのびんかんのきねのひ

一十九 兼息 ちまかたのよつしをさかたねのいんししかたにふれどせきを

三十三 ねちきみいかみかーまざんまのいりあひまのあふうなをさすのよ

二五 兼息 みのー野のちまうつごさハキーまのちまのなつをもちかよそん

三十九 一きよのみのひのなみのあがむひぬーいんたはなはあせよけ

紀仁徳 長哥 よるまーきかたのくまーよろちひぬくふゆうらんまのき

四十二 ちぬのんごつをまぎなむたにのちかのいんたのいんたはなはあせ

一廿一 兼息 ちまののみをさるいんたのいんたのさかまぬひあひみするのよ

三十一 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

三十八 兼息 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

五十六 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

一廿六 あーひきのちまーいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

続紀一 一 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

よりの大臣のまをー政のまをーちまのいんたのいんたのいんたの

三十三 兼息 過去 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

一廿六 兼息 ねのち ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

廿二 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

廿二 同廿二 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

廿二 同廿二 ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

廿二 兼息 ねのち ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

同廿二 ねのち ちまのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたのいんたの

又種
やト重

五世丁 長奇

ひとみなるのシカルあのみやまのりる云々

此も上よ云るがごとし、貫之集「高砂の峯はまつ
とやワレハナリナシよのなうをまもる人とやられハ
かりまん。これ同トやうの例なり。

こそ通
のも

紀推古 長奇

うぐーあもそぎのころをおまきみのついでにらー

五世丁

きんひのひをまぬいんふゆいんをーたひんひのひをーいげらめ

但一さてのらめ。つねのむをめよかしてい
るよも有グー。きりきるとま。こゝの例は非ず。
詞花一 まのひもあられあひーのきりきりの外山のなをみまをめまにけり

あよ

八世丁

あき田かるうつたひんまきんがんねがかりのひさむー霜もあきぬがよ

四世丁

このやどの夕のげんきのきり露のけぬがにぬかたはむゆいのも

ナセ丁 うれんまやあかかきぎん今こそい聲のからあよまきまよまめ
同辛酉 あきづけが水草の花のあえぬがよあわどあらじんにあぞれを
五世丁 長奇むろがのつるのつみせうぬがようろいんどもいんねなくに
八三手 長奇おつこち花玉はぬく五月をちうみあえぬがよ花咲よけア云々
十三丁 同あまをとめらうらうらうせむひれもてるがよ白妙の袖あさくつ云

あよ

記仁徳 詞

あーもあがなねこみこまひき

これい足も足掻くがよといふをつづめとるあ
り。この故よらをきみて唱ふれどもがよと同言
あり。

がね

記仁徳

あゆめくちやとぎんけのみおまひがね

三三三

まはらをの弓末うつおこーいつる矢をのちん人かろうづがね

鍼囊上

くの

十四 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
同廿 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
八廿 けがみまんと我ぞとやうき藤きみいま咲よけ
廿 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
廿九 けがみまんと我ぞとやうき藤きみいま咲よけ

け

けん

記景行 けん
三十四 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
廿九 けがみまんと我ぞとやうき藤きみいま咲よけ
伊勢物語 けん
此外 けん「けん」を「けん」を「けん」を「けん」な
けん「かな」けん「や」けん「あ」けん「な」けん「やう

けん

よ云ること万葉よめづらからぬことあり
つねのけん「けん」ふまごもなけまぎ畧けり
十五 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
廿九 けがみまんと我ぞとやうき藤きみいま咲よけ
元輔集 けん「けん」ふまごもなけまぎ畧けり

けん

十四 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
廿九 けがみまんと我ぞとやうき藤きみいま咲よけ
拾遺 けん「けん」ふまごもなけまぎ畧けり

けん

十五 ちまひの野まはかてしりたへちのみのよあふせあも
廿九 けがみまんと我ぞとやうき藤きみいま咲よけ

十九廿一 あまのむさおろよみあしーなる神のけりまをうらがけけめか

けく

一廿二 みよの野のおまのあらけちむけんまをうらひひのひのひらね
四廿三 んなりのあまのきんちのけけんまをうらひひのひのひらね
六廿四 かなまのけけんちんちまのたよるんまにまをうらひひのひらね
古今大 よのなまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの
同十九 まめまのけけんちまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの

ける

三廿五 しんまをうらひひのひのひらねけけんちまのあまのけけんちまのあまの
十廿六 しんまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの
十三廿七 ひんまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの
十三廿八 ちんまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの

廿廿一 ^{長哥} しんまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの

ける

六廿九 んまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの
七三十 んまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの

けれ

廿廿四 ままのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの
按よ置てありをおけり置てあるをおけると云
ハ常まりそのりるを第四位は轉して下知の意
とまることと又常の定まりされどおきてあれ
をおけれ持てあれをもてれといふ類今世は
耳なれざればこゝよあぐ。

こそよ

記仁徳 ^{長哥} しんまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの
同允恭 ^同 かみかすあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまのけけんちまのあまの

十三世 つかちのけちまきあぢみあひぬとも又あぢり入りきみをまさん
 十四世 うぐひまのたへんらうりうちをめでかけしぬともきんをまさん
 十五世 いそらの小野ゆ秋津よまじりる雲すもあれちまきをまさん
 十六世 あまけんあつちうつぬのあぢのみあひてるせをじきをまさん
 十七世 みちのべいづきむらうのいつゆへひとのゆるさんことをまさん
 十八世 おもたぬをおもひいそ大野なるみらちのむらかみちらさん
 十九世 おもたぬをおもひいそまらうをむらうのむらかみちらさん
 二十世 ^{長哥} よろづよにかんちちらさん
 二十一世 ^同 かみなまをかこつゆみん云々
 二十二世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十三世 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十四世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十五世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十六世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十七世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十八世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 二十九世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十一世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十二世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十三世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十四世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十五世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十六世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十七世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十八世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 三十九世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々
 四十世 ^同 あぢりごちかこあぢりん云々

十七世 いもがいはいくりのむりけぢぢの花いまこんをるもつねかくみん
 十八世 こまわこのみちよいでちゆくあれいきみごころをおひてゆん
 十九世 あーの葉よゆきり立てかむがねのさむきゆへーなをばぬぬん
 二十世 あぢをりれおのみよこひてふらふめゆきのふけそこちうけん
 二十一世 さくら花さきいまきねどるひこのこひのさのりといまちるらん
 二十二世 あひおもたぬ人をやもこまぢらうのそてひつまにねのみなるも
 二十三世 ^{長哥} ちちんちんちんちんをうきこまきへよまさん花をみつぬぬたな
 二十四世 これらはん又けんらんとうけとり
 二十五世 いごいあんをきいあらんをうらなうくまきよのさのまきをまきて
 二十六世 ^{長哥} なみーあもときーいあらんを云々
 二十七世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 二十八世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 二十九世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十一世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十二世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十三世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十四世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十五世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十六世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十七世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十八世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 三十九世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々
 四十世 ^同 なみーあもときーいあらんを云々

鍼囊上

全八

